
残されて、留まって。 (原作: 縦澤楽先生『残留』)

カンコツ工房

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残されて、留まつて。（原作：綾澤楽先生『残留』）

【Zコード】

Z5425D

【作者名】

カンコツ工房

【あらすじ】

はじめまして、カンコツ工房と申します。作家様から「提供いた
だいた原作を元に、『換骨奪胎小説』を執筆するというプロジェクト
を考え、さっそく第1作目が仕上がりました。どうぞよろしくお
願いいたします。

(前書き)

本作の原作は、縦澤楽先生の『残留』です。
あわせてお読みいただけるといつもお楽しみいただけるかと存じ
ます。

マジありえない。

ウチを置いていつちりやうなんて。

昇太。

ウソつて云つてよ！

いつも自信満々でウチに「お前のこと、なにげに、世界一の幸せ
モンにできる気がする」とか云つてたくせに…

凹んだとかパークったとか、落ちたとか、そんな言葉じやゼンゼ
ン表現できない。足りない。

発狂 とか、云うならばそんな感じだ。

早崎早希。 15歳。

ウチはこの、ダジャレみたいな名前が嫌いだつた。

だけど昇太は「お前の名前、オレ、好きだけだな」って云つてくれてた。

昇太に告白されたのは、去年の7月27日。中2の夏休みがはじまって一週間が経つたときだつた。

昇太はバスケット部。ウチはバスケット部のマネージャー。

ウチが部活の練習中に、部費でポカリとかの買い出しをして部室の冷蔵庫に入れてから体育館に戻つていると、外練のランニングを終えた部員のみんなが汗をぬぐいながら帰つてきたところだつた。

男子のほつた肌に浮かぶ汗が、夏の日射しに渴かされていくのが見えるような気がした。

だけど昇太はあまり汗をかいていなかつた。昇太は長距離走や暑さにめっぽう強いのだ。

「おかえり」

昇太がウチに素っ気なくそつぶやいた。そして、

「……なんかアレだな」

ウチの方に歩いてきながら、

「オレ、将来お前に『お帰り』って、毎日云つてもらいたいって気がする」

そう云つたのだ。

「……なにそれ？」

ウチが聞き返すと、昇太は

「うん。告つてみた、なにげに
こともなげにそう云つたのだ。

初めてのデートはウチの家だった。

いきなり自宅に来たのだ。だって、昇太が来たいって云つたから。

家にはママもいた。ウチはがんばってチャーハンを作つて振る舞つた。

料理なんでしたことなかつた。だけどがんばつたのだ。だって、昇太がウチの手料理を食べたいって云つたから。

海にも行つた。家族でキャンプにも行つた。

町の夏祭りには浴衣で出かけた。

秋になつて涼しくなると、川縁の土手をよく散歩した。鈴虫が綺麗な声で鳴いていた。

ファーストキスは放課後の誰もいない渡り廊下だった。

閉め忘れてあつた窓から吹き込む風でカーテンが揺らめいて、誰か来たと思ったウチらはビクッてなつて慌てて身を離したのを覚えている。

あのときの少し涼しくなつた空氣も、熱く上氣した昇太の顔も、珍しく額に汗を浮かべた少しこわばつた表情も、鮮明に覚えている。

ウチはいつも見えて、けついつも悪い子だつた。

6年生のときはお酒を飲んでいた。

万引きは一度や二度ではない。毎週の口課のようなものだつた。補導されたことが一度もなかつたのは、いま思えば良かつたことなのか悪かつたことなのか、わからない。

中学1年のときはいじめも徹底的にやつていた。

テストのカンニングもバレなかつた。ウチは基本的に人の目を盗むのが上手だつた。

だけど、悪いことをしても見つからないからといって、やつてないことにはもちろんならない。

ウチは中2になつたときに、やつてきた思いつく限りの悪事から

手をひいた。

そしてはじめから非行なんてした」とない顔をして過(い)じてきたのだ。

ウチはこれまでのことを全部昇太に話した。

昇太は黙つて聞いていた。

引かれたかな？ と思つた。表情は硬かつたし。でも昇太は、

「よく話したな。白状したことで許されるんじやね？」

そういうてウチの額にキスをしてくれたのだ。

「早希のこれまでのこと、オレは、許す」

初エッチをしたのはその日のことだった。

なんだか頭がボーとしていてよく覚えていない。なぜだかはつきりと覚えているのは、ベッドがギシギシなつていたつてことだけだ。

「……すまね。先にイッちゃつた」

「……いじよ。できただけでも、感動」

それから、ウチらは毎日のように身体を重ねた。

昇太はウチの身体を背中から抱きしめて耳たぶを舐めながら胸を揉むのが好きだった。

そして、挿入の前には身体中を舐めました。

ウチの身体は、昇太の前ではソフトクリームみたいなものだった。

エッチ以外にも、たくさんの想い出を重ねていった。

昇太はウチを愛してくれたし、ウチも昇太のことが大好きだった。

そして。

3月29日。

運命のあの日がやつて來た。

ファンタスティックランドに來たのは小学校5年生のとき以来だつた。

ウチも昇太もガキみたいにテンション上がつていた。

まずは手始めに“怖い系”の館とか病院だとかのやつに乗つて怖

がり、そのあと軽めの絶叫マシーン、「ゴーカートなんかを楽しんで、お昼になつたので混雑してるレストランで二人ともカレーライスを食べた。

「ここのカレー、美味しいな」

昇太がそう云つた。

「これくらいだつたらウチも作れるよ。ウチの作ったのがもつと美味しいし」

「早希つてチャーハン以外にも料理作れんの?」

「作れるよ。チャーハンと、カレーと、シチューと、……あとおじや」

「レパートリー少なくね?」

「いいじゃん。これから覚えるよ」

そして食後は散歩コースを少し歩いて腹ごなしをしてから、本田のメインと決めていた、「阿修羅観音G」の乗り場へと向かつた。

阿修羅観音Gはファンタスティックランド最恐のジンギスカーネー。1両に4席あつて、全部で8両編成。

「ここのあとは観覧車に乗らうね」

「いいよ。でもまずはここの阿修羅観音に集中ー。」

「了解！」

ウチらバカップルと、その他28名の合計30名を乗せた阿修羅観音Gが、音をたててスタートした。

「……ねえ昇太、こんなに音がするものなのジェットコースターって」

「それも含めて演出つーか、だから“最恐ジェットコースター”なんだろう？」

「そうだね……うわっ？！　っ？！」

そのあとは会話を続けられなかつた。ジェットコースターが急速したのだ。

あとで思うとこの会話が一人でかわした最後の会話だつたのに。

バキン！　ガツ！！

「えっ？」

「キヤーッー！」

巨大な金属の恐竜の関節が外れたかのような激しい音がして、トラックにでも撥ねられたようなありえない衝撃が全身をぶち抜いた。

30名の人々の絶叫は、ウチの耳には届いていたのかもしない

けど、そのときのことは実はよく覚えていない。

ただ、 気がつくとウチは、救急隊の担架に運ばれていく昇太の血まみれの身体を呆然と立ちすくんで眺めていた。

ジェットコースターの事故。

ファンタスティックランド「阿修羅観音G」の3両目が脱輪。

負傷者は57名もいた。

大惨事だった。

昇太は意識不明の重体だった。

ウチは片時も離れずに昇太のことを見守った。

だけど、事故から一日後に、昇太は天国へと逝ってしまったのだ。

なんで?

なんでなんでなんで?!

どうしてよ！

ウチは誰にも聞こえることのない言葉をわめく。

昇太の家で行われたお葬式。

黒いリボンの額入りの写真。

昇太は生前と同様不敵な感じで微笑んでいる。

ウチは、昇太と一緒に逝こうと思つて待つていただけなのに。

別にこの世に留まりたいと思つて待つていたわけじゃなかつたのに

！！

「どうして昇太は天国に行けで、ウチは成仏できないのよおつ！！」

昇太。

ウチを置いてこつかやつなんて。

マジあつえない。

(後書き)

「換骨奪胎」……骨を取り換え、胎を取つてわが物として使う意。先人の詩や文章などの着想・形式などを借用し、新味を加えて独自の作品にする」と。（Yahoo辞書より）

本企画は、交流掲示板「秘密基地」様の、「小説のヒント」にて原作提供をお願いし、ご提供いただいた作品を元に書いたものです。原作の着想が素晴らしいかったので、あとは楽しんで書く進めることができました。

今後も自身の執筆修行の一環としてこの換骨奪胎小説プロジェクトを続けていきたいと思っていますので、皆様のご協力をよろしくお願ひいたします！

追記：

作中にて、遊園地におけるジェットコースター事故を取り扱っています。もしお読みになられた方の中に、同様の事故に遭われた関係者の方がいらっしゃいましたら、不快な思いをさせてしまうかもしれません。申し訳ございませんが、当方に悪意はないまませんので、ご了承下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5425d/>

残されて、留まって。（原作：縦澤楽先生『残留』）

2010年10月17日14時59分発行